ある繁華街の一角に小さな花屋があった。
そこの副店長、瑠美子にはちょっとした心の傷があった。
幼少のころから優しかった瑠美子は周りの為にといろんな事に我慢してきた。
そんなある日、ついに切れた！！
「こんなとこ…、出てってやる」

それから数年後…
いつしか小さなフラワーショップ
“Better　ROSE”の副店長になっていた。
従業員は、店長、副店長、千秋の３人
少しは名の知れたフラワーショップである。
家族的な付き合いのできる小さなショップならではの暖かさのある店でもあり、お客からも気軽に入れる店として親しまれている。
千秋は、そこの看板娘とも言うべき存在だった。
時には明るく、優しく、喜怒哀楽の激しい“やんちゃな小娘“と言ったところだった。

そんな店で起きたある晩のこと…
「や～きいも～っお～♪、焼いも～♪」
冬も終わりに近づく、小寒い時に良い香りと共に聞こえるこの声は…
まぎれもなく“焼きいも屋”さん！
「私買ってくる！！」
そう言って飛び出していったのは瑠美子だった。